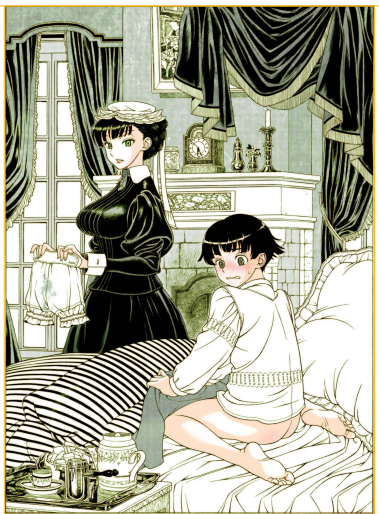


## プロローグ

それは朝の出来事であった。

小柄な少年が、天蓋てんがいつきの大きなベッドの上に上体を起こし、脇わきに立つ胸の大きな女中長ハウスキーパーを不安そうに見上げている。

この短い黒髪の少年は伯爵家の令息れいそくで、名をウィリアム・マルクという。



「ウィル坊ちゃまくらい  
のご年齢の男性に起きる  
生理現象です。なんの心  
配もいりません」

今年で二十九歳になる黒髪の女中長トリスはそう言って、緑地に茶の混ざる淡褐色ヘリゼレの瞳を細めた。

まだ手足の伸び切らないウィルに比べると、トリスの背は頭一つ分以上も高い。

四十人もの女中メイドのいる屋敷の女中長を任されるだけあって、こうしてぴんと背筋を伸ばして立っていると、凜りんとした威厳のようなのを感じてしまう。

女の鼻筋はすつと白く通っており、高価な調度品を思わせる硬質な色香いろかほを漂たなわせていた。癖のない前髪は眉のあたりで切りそろえられており、長い後ろ髪は幾筋いくすぢかの三つ編みにまとめられ、白い女中帽モラキヤツブの周りで固く結わえられている。それが一層、女に豪奢ごうしやな印象

象をもたらし  
ていた。